

農の未来ネット

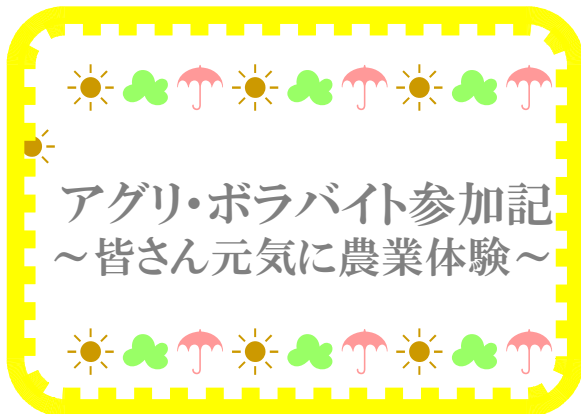
NO.51
10月号

特定非営利活動(NPO)法人「農の未来ネット」
理事長：倉本器征(東京農工大学名誉教授)

発行責任者：田沼繁(NPO法人農の未来ネット事務局：電話&FAX 042-313-3620)

編集長：西村正昭

<http://www.nou-mirai.org/index.html>



はじめに

昨年12月の農業体験プログラム説明会に引き続き、今年も、武蔵大学で6月6日(木)、6月19日(水)の昼休みに説明会を開催。6日の参加者は3名で気落ちしましたが、19日は25名の学生が説明会場に来てくれました。19日の説明会は関係者の説明にも大変な熱のこもりよう。その結果でしょうか、その場でアグリ・ボラバイトへの参加申込書を書いてくれた方が5名。実際に、この8月・9月に実際に農家へ出向いてくれたアグリ・ボラバイターは実員4名(述べ5名)でした。本号では、農家での農業体験をされた3名の方の実践の感想を掲載いたします。



●外間しおのさん

(武蔵大学人文学部 日本・東アジア比較文化学科 4年)

「ここで一週間やっていけるのだろうか？」初日にミニトマトの苗の手入れをした時にそう思いました。自分の手を見ると、トマトのあく(・・)に塗れて黄緑色にかぶれていたからです。私は8月20日から26日までの一週間、ミニトマト農家で仕事のお手伝いをさせていただきました。その日まで私は、農業にはどのような仕事があるのか、ミニトマトにはどのような育て方があるのかを全く知りませんでした。吉田さん一家は、私が



農業のことに関して <受け入れ農家の吉田さん> 無知であるにも関わらず、私に親切に仕事を教え、あらゆる面でお世話をして下さいました。しかしそれでも、今まで知らなかった農業の過酷さも垣間見ることもになりました。若い世代がなぜ農業の現場にあまり関わろうとしないのか、そこには様々な理由があることでしょう。私がこの一週間で学んだことも、その一端でしかありません。早朝から肉体労働は続きます。天候や環境によってはそれに見合った収穫が必ず得られるとは限りません。さらにそこへ、快適な都会での事務仕事や華やかな仕事へのあこがれから、若者は農家を離れて行くのだと教わりました。吉田家を長年支え続けてきたおばあさんが私にアドバイスして下さいたことで一番ショックだったことは、「外間さんがもし、アグリボラバイ

トではなく本格的な農作業をやることになったら、きっと逃げ出していたと思うよ。」という一言でした。農家の仕事は過酷です。その過酷さややりがいを実感するには、一週間ではあまりにも短すぎるのでしょうか。その他にも、TPPに対する日本の農家がどのような意見を持っているのか、土地と野菜の相性、本格的な農業体験とアグリボラバイトの違い、ミニトマトのおいしい食べ方等々、あらゆることを学ぶことが出来ました。私が最後に吉田さん一家にアドバイスされたことは、これからも常に農業に目を向け続けてほしいことと、買い物をする際にも野菜は真剣に選んで買ってほしいとのことでした。近年農業に興味を持つ若い世代が増え続けており、その人々が農業に携われるように働きかける団体も多くなっています。今回はその運動の向こうに何があるのかをうかがい知ることが出来ました。

この機会に巡りあわせて下さった農の未来ネット様と、吉田様御一家に改めてお礼を申し上げます。



●戸田浩一朗さん

(武蔵大学経済学部 経済学科3年生)

深谷に行くのは3回目、段々と親戚の家にも久しぶりに行くかのような感覚になってきました。深谷に行くたびに腕が一回り太くなってるような気がします！

前回行ったのは冬の終わりころで、まだ雪が降っていたのを覚えています。今回のアグリボラバイトは季節が正反対で真夏の炎天下、ひたすらネギの間の雑草を引っこ抜きました。農の

未来ネットさんの農作業でもそうでしたが、やはり農業というのは「病気、雑草、虫との戦い」です。冬の体験ではなかなかわかりませ んでしたが夏の時期は「薬剤を使えばどんなに楽だろ



う」、「しかし使いすぎても食べる人間にも土壌にもよくない」、天気を見ながら「どのくらいいつどこに 薬剤をまこう」など、農家さんはいろいろなことを考えているんだなあと感じるとともに、農業の難しさをよく感じました。お世話になった農家さんに移動中、深谷で一番ネギを育てるのが上手な別の農家さんの畑を見せてもらいましたが、雑草ひとつない、きれいに成長も形も色もそろったネギがずらりと向こうまで続く畑でした。手間をかければ良いモノができる一方、大規模生産にはある程度の薬剤散布が必要であることがわかります。農業は頭も体も使わなければ決してできないものだとよく理解できました。

深谷には行く度に勉強することがありますので、そろそろ就活が始まりますが機会を見てまた参加したいと思っております。(研修中の中国人に中国語も教えてもらって一石二鳥です！)



●高橋昌平さん

(武蔵大学)

農家で過ごした五日間で僕がわかったことは、農業(農作業)と収穫はイコールではない、ということである。農業に携わる方々にとっては何言ってるんだ、そんなことは当たり前じゃないかと思うかもしれないが、21年間生きてきて小学校の芋ほり体験しか



したことがなかった僕

にとってはそれはとても大きな発見である。朝は4時に起きる。昼間は暑くて仕事にならないからだ。日が昇ればとにかく暑い。ビニールハウスの中は44℃あって汗は拭いても拭いてもでてくる。小さな苗に一つ一つ水をあげたり、苗を植える場所に印をつけたりと黙々と作業をこなす。来る前に想像していた「こんな大きいのが採れました！」とは全く違う世界に僕は自分が無知であることを教えられた。

僕がボラバイトを通して一番学んだことは農

業とは助け合いである、ということだ。明日は誰々さんの所へお手伝いに行って明後日は手伝ってもらって……と皆で協力し合いながら取り組む。これも実際に経験するまでは全く知らないことで、とても素晴らしいことだなと思った。

助け合うことの大切さをこれからの人生の中でも大事にしていければと思った。



みらい体験農場 稲刈り祭

「みなさまのご協力を得て、今年も稲のめぐみに感謝」

当初予定した10月5日(土)は朝から雨の予報。前日に、次の日に日程を順延する旨メールで参加申込者に通知しました。やはり、5日は朝から予報とおりの雨。「ああ～無常」。参加予定者からは「参加できずに残念ですが、お天道様にはかないませんね。」と。その通りです。6日(日)は雨が降らないように、祈るばかり。当初の参加予定者は20数名でしたが、順延がたたなり6日の参加者は大人11名(うち大学生2名)、子供2名の13名。でも、おおいに盛り上がりましたよ。

お祭りメインイベントは、稲の手刈りなのですが前日の雨の影響で稲が濡れており、午前中に刈りいれることが無理な状況。そこで、サツマイモの収穫を先に行うことに。まずは、サツマイモの蔓きりです。はびこった蔓を切るのは容易ではありません(写真1)。



【写真1】

芋づるとの格闘？

パープルスイートロード、タマユタカ、オキコガネ)はそれぞれ2畝ずつ収穫することにしました。蔓切り最中にも、サツマイモの顔が畝から覗いています。豊作の感、しきりです。蔓を切り、マルチビニールを剥ぎ、スコップで芋を掘り上げます。すごっく、でっかい芋も(写真2)。



【写真2】

大きな大きな芋が取れました

会員の皆様に送るための宛名書きは、西村さん、中澤さんの奥さん方が担当してくれました。掘り上げた芋は、大中小にわけ、会員に公平に箱詰にし、発送したところです。食味の方はいかがだったでしょうか。アンケートにもご協力くださいね。

さて、芋の収穫・発送が終わり、お楽しみの昼食・交流です。一之瀬農場長の奥様が長野の郷土料理「おにかけ」をご馳走してくれました。具だくさん(12品目)の汁にうどんを入れたもの。うん・・・なかなかの美味でしたよ(写真3)。



【写真3】

「おにかけ」を食べながら交流

午後からは、稲刈りです。最後に残った「彩のかがやき」です。田んぼが小さいので、参加者全員での手刈を予定していたのですが、時間が少ないことから周りを手刈、中心部分はコンバインでの収穫でした(写真4)。これで、稲は全部

収穫終了。これからは籾摺り、精米を行います。



【写真4】
収穫も最終ラン

今年1年の稲作作業は皆様の参加をいただき、無事終わることができました。有難うございました。来年も、よろしくお願ひします。

NPO法人農の未来ネット 事務局員が最近想うこと (その2)

「農の未来ネット」事務局 岩藤一樹

農水省のOBで亡くなられた浅井昭三さんに誘われて、農の未来ネットサロン学習会に参加し、気がついた時には、農の未来ネットの会員、米づくりマスター会員になり、月1回ほど、大宮農場に通っています。

農場では、一之瀬農場長、田沼事務局長の指示のもとで農作業に勤しんでいます。ただ、日々の不摂生が祟り、労働力になっているのかどうかは疑問です。それでも腕が赤銅色に焼け、専業農家の人並みに染まっています。

私自身、もともとの専攻は都市計画ですが、学生時代に過疎問題を勉強していたこともあり、農作業にはそれほど違和感がありませんでしたが、これまでは出された料理をただ食べる人、野菜の栽培や価格等については、全く無知というか、関心がありませんでした。ただ、昨年からは自宅でも畑をやり始めましたが、放置し、何もしなくても勝手に育った子供たちと違い、手間暇かけてもなかなか上手く育ちません。今は農作業の合間のお茶の時間に、細田先生、一之瀬教官から栽培方法や料理方法の手ほどきを受けております。また、大変おいしい一之瀬農場のミニトマトの種を

譲り受けようとしたところ、新品種保護法の脱法行為であると教わり、休息時間は、生活に根差した幅広い勉強の場となっております。

農作業終了時には、一之瀬農場からスイカ、冬瓜、ミニトマト、オクラ等、新鮮な野菜を頂戴するのも農場への楽しみの一つです。

頂いた野菜が如何程のものかと確認するためにスーパーに行き、野菜の価格の高さに驚く一方で、自ら栽培したお米、サツマイモ、ネギの安さに愕然とし、農場へ通うようになってから、消費者と生産者の両方の目線があることを自覚するこの頃です。



編集後記

埼玉県春日部市のそば処「神間亭」で夫婦でスタッフとしてボランティアをしています。その場所の入れ口の約15坪の畑に9月中旬から野菜を作っています。ブロッコリ、ホウレン草、イチゴを植えました。「神間亭」亭主の根本健美さんと倉持勝一さんご夫妻の援助と協力を得ました。夫婦で野菜を作るなど考えたことはありません。取材やボランティアで野菜作りを体験しましたが、自らの責任で作るとなると相当な覚悟が必要だと痛感しました。気持ちもお手伝いという気分から自覚してやらなければという思いが強くなりました。一つひとつの作業もしっかりしなければという気持ちで取り組んでいます。逆に自分の責任だから少々いい加減でいいやという思いもします。マルチにホウレン草の種を2, 3粒まけばいいと教えられましたが、10粒も一つの穴にまいてしまいました。芽が出てきていい加減に蒔いたのがはっきりとわかりました。農業はウソがきかない。やったことが現実にわかる。野菜作りをして、改めて人生にとっても大切なことを学びました。

(西村)

